

高等学校段階における文学の予見力を核とした 探究学習の研究 —授業実践の分析及び考察を中心に—

植山 俊宏・伊藤 汐里^{*}・湯浅 佑介^{**}

Inquiry Learning with Literature Foresight at the Core at High School Level: Analysis and Consideration of Classroom Practice

Toshihiro UHEYAMA, Shiori ITO^{*} and Yusuke YUASA^{**}

Accepted June 16, 2022

抄録：本研究では、高等学校国語科の文学の探究学習の到達水準レベルの実践と探究トレーニングの実践の2例を分析して、探究学習に必要な内容、方法を考察した。まず到達水準レベルの実践の分析では、「予測困難な時代」に対応する想像力の育成、実践の背景にある現代的視点について考察した。ついで探究トレーニングの実践の分析では、合理性、成果の質などを考察した。成果は、高水準の実践の質、実践成立の条件や要素の明確化などが確認できたことである。

索引語：高等学校文学教育，文学の探究学習，文学の予見力，読み比べ，嵯峨野高校近現代文学講座

Abstract: This study examined the content and methods necessary for inquiry-based learning by analyzing two examples of high school Japanese language arts literature inquiry practices, one at the achievement level and the other in inquiry training. The analysis of the achievement-level practices examined the development of imagination in response to "unpredictable times" and the contemporary perspectives behind the practices, whereas the analysis of inquiry training practices examined rationality and the quality of outcomes. The results showed that the quality of the practices was of a high level, and that the conditions and elements for establishing the practices were clearly defined.

Key Words: High School Literature Education, Literature Inquiry Learning, Literature Foresight, Reading Comparison, Sagano High School Modern, Contemporary Literature Course

^{*} 京都市立工学院高等学校教諭

^{**} 京都府京丹波町立蒲生野中学校教諭

1. 研究の目的・方法、及び背景

(1)研究の目的・方法

1) 研究の目的

2022（令和4）年4月より探究学習を核とした改訂高等学校学習指導要領が実施されたが、国語科の文学の分野では実現を巡って混乱が生じ、教育現場の対応が不安視されている。本研究の目的は、高校の文学の探究学習について実践例の考察をふまえ、その実現の可能性を考究することにある。

2) 研究方法・手順

- ①高校文学教育の探究学習の不活性状況、旧弊な文学教育の問題などについて総括を行う。
- ②コース選択性による探究学習の本格的な実践例の考察を行い、到達水準を見極める。
- ③学級単位のトレーニング的な実践例の考察を行い、学習者全員が到達可能な方法を見出す。
- ④小説を中心とした高校文学教育の探究学習の成果と課題について集約し、本研究の結論とする。

(2)研究の背景—高校文学教育における探究学習の現状の総括—

1) 文学教育の危機と展望の欠落

平成30年告示高等学校学習指導要領において、改訂の主眼が「探究」に置かれた。各教科を見ると、これまでの先行的な探究的な学習の向上をさらに加速させている。国語科においてもなどは、公民との連携で実用的な文書のリテラシーの深化が図られているし、理科の諸科目で研究レポート、プレゼンテーションなどの表現力の向上の貢献が進められているが、これらは、国語能力を実社会に活かす方向性であり、国語自体の特質・特性を的確に捉え、探究を行う方向性は持たない。国語の独自性を反映させるとすれば、これまで重要な位置を占めてきた文学教育を再編し、探究の方向性を確保していく必要がある。探究を核とした新しい文学教育の再構築が求められるゆえんである。

2) 新しい文学教育の考え方と方向性

高校文学教育は、小説教材を例に採ると、「羅生門」、「山月記」、「こころ」、「舞姫」、「夢十夜」、「城崎にて」などが定番化され、実践されてきた。名作主義という批判がある教材のシフトである。

これらの作品が書かれた時代は現在から70年以上前である。「名作」に一定の普遍的価値を認めるにしても、小説がその時代の世相、問題を反映するという一つの大きな目的と性格を持つと考えると、これらの名作が取り上げた問題は古い時代のものとせざるを得ない。学習者にとって、作品に対する距離感や違和感が大きすぎるのである。過去は切り捨てるという単純な論理ではないが、新しきを求める姿勢に欠ける文学教育は再検討されるべきであろう。実際には、国語教科書に「名作」教材とともに同時代的な教材も多く採択されているが、その活用法が十分に開拓されていない現状にある。¹⁾

21世紀は「予測困難な時代」が進行すると想定されている。この「予測困難」に対する文学のあり方がもっと重視されていいはずである。「予測困難な時代」に対する文学教育は、この時代の問題に真向かい、問題解決の諸相と実効性を探究することを一つの責務として希求すべきであろう。²⁾

3) 文学作品が描く問題解決の世界

文学作品は、書かれた時代の重要な問題を反映しつつ、その問題の解決の諸相を描く。この解決には、単に結着という問題解決だけではなく、成功や好転、改善、展望、期待なども示すし、逆に失敗、破滅、閉塞などの暗転的な帰結も含む。文学論理に則って想像的にその結末に至る世界とその展開を示すのである。この問題解決的な世界を重視し、想像により「予測困難な時代」を捉え、そこに見られる問題に向き合い、解決を図っていく新しい文学教育の現実的な志向を求めることが必要である。

文学の 21 世紀的な問題解決の取り組みの例として、新しい家族像とその問題解決を上げる。旧来は継母などの非血縁による家族の問題が描かれることが多かったが、近年、急激な変化を見せている。「ステップファザー・ステップ」宮部みゆき（1993）を一つの契機として、21 世紀に入り、「卵の緒」瀬尾まいこ（2002）、「八日目の蟬」角田光代（2007）、「うさぎパン」瀧羽麻子（2007）、「オー！ファザー」伊坂幸太郎（2010）、「漁港の肉子ちゃん」西加奈子（2011）、「そして父になる」是枝裕和（2013）、「昨夜のカレー、明日のパン」木皿泉（2013）、「そして、バトンは渡された」瀬尾まいこ（2018）、「万引き家族」是枝裕和（2018）のように発表されている。これらを「予測困難な時代」における問題解決の反映と捉えることで、読者にとって未知の世界の問題に対する解決の見通しを得られよう。

4) 文学の想像力と近未来の予見性

文学における想像が非現実の世界、あるいは未知の世界の想像的現出を可能にするならば、この未知の部分に時間的な将来、未来の世界を含めることは難しくない。となれば、文学が描き出す世界、読者に想像せしめる世界は未知の世界の予見の力・感覚を持つと考えることができる。

近未来を予見する力・感覚を文学の想像力と結びつけたとき、新しい文学教育の地平が拓けそうだが、それは自動的に読者にもたらされない。文学が近未来を拓くとしたら、それを価値づけるのは読者に委ねられる。単に近未来の提示として受け止めるか、そこから来るべき未来の価値を見出すかは、読者の探究にかかっているといえる。この探究的な問題解決に取り組み、読者自身が価値を生み出すことで文学は新たな価値を獲得する。これを新しい文学教育の機能とすることができよう。³⁾

2. 実践例の考察 1 —嵯峨野高等学校アカデミックラボ「日本文学から見る近・現代」

(1) 京都府立嵯峨野高等学校アカデミックラボ「日本文学から見る近・現代」

「アカデミックラボ」は、2 年生の生徒が“仮説・テーマ設定”、“実験・実習計画”、“実験・実習”の過程からなる探究活動に取り組むことで「課題設定・解決力」「表現力」「地球規模で考える力」「英語・異文化コミュニケーション力」「リーダーの資質」を培うことを目的とした探究学習である。⁴⁾

(2) 「日本文学から見る近・現代ラボ」に対する京都教育大学高大連携事業としての支援

京都教育大学では、高大連携事業として 2015 年から 7 年間連続で近現代文学講座「日本文学

から見る近・現代ラボ」に大学教員とともに大学院生・学部生も参加し、指導・助言を行っている。このラボでは、文学のもつ予見性に着目し、文学作品を主体的に読むことを通して 21 世紀型の問題解決力を手に入れることを目標にしている。今年度は生徒が 4 名程度のグループに分かれ、それぞれ 21 世紀に通用するテーマを設定して、4～9 冊の小説を選び読み比べて探究学習を行った。学習者は成果をパワーポイント資料にし、プレゼンテーションを行い、互いの学びを共有している。⁵⁾

(3)「日本文学から見る近・現代ラボ」の目的と手法、およびテーマ・選択された作品

1) 設定されたテーマと選択された作品（○は概説対象作品）

小説に表れた作品世界を手がかりに主体的に小説を読み、描かれる社会の様子や人間の内実を読み取ることで文学の価値や機能に気づき、「予測困難な時代」に対応する想像力の育成が期待できるところにこの取組の価値がある。2021 年度にそれぞれのグループが発表で使用したプレゼンテーション資料の考察を行いながら、読み比べた本の中から特徴的なものを抽出しつつ解説を行う。「21 世紀型の探究」というテーマでなぜ高校生にその作品が選ばれ、どのような考察が行われたかを分析することを通して、彼らの文学に反映される問題に対する同時代的な向き合い方を捉える。A「時間が小説に与える影響」、B「時代の変遷に伴う記憶喪失の描写の変化」、C「お悩み解決小説から見る「悩み」の対処法」、D「承認欲求の暴走とその結果」の 4 グループが活動した。＜表 1＞として示す。

2) ＜表 1＞ A グループ「時間が小説に与える影響」の主要選択作品の概要と特徴

○『時をかける少女』筒井康隆 1967 年

時を自在に超える力を身につけた少女が主人公のタイムトラベルもの。SF と学園、青春などの要素が散りばめられている。半世紀前の作品であるが、近年タイムトラベルやタイムリープを題材にした小説やドラマ、映画が流行しており、中高生にも馴染みやすいストーリーであることが窺える。また作者の筒井康隆はこの『時をかける少女』がライトノベルの走りであると発言している。2006 年、細田守監督によりアニメ映画化。『サマーウォーズ』（2009 年）、『おかみこどもの雨と雪』（2012 年）等と併せて国内外で高く評価されている。

○『コーヒーが冷めないうちに』川口俊和 2015 年

脚本・演出家でもある川口俊和によって 2010 年に書かれた戯曲を本人の手で小説化した作品。店内の「ある席」に座ると、コーヒーが冷めるまでの間だけ過去に戻ることができるという不思議な喫茶店「フニクリフニクラ」を訪れた四人の女性達の物語で、タイムリープが作品の重要なファクターとなっている。全四部構成となっており、それぞれ中心となる人物が据えられている。戯曲のノベライズであるため台詞が多く、テンポよく読み進めることができる。2018 年に続編『この嘘がばれないうちに』を原作とする同名映画が公開された。

○『君の名は』新海誠 2016 年

1200 年ぶりとなる彗星の接近を一ヶ月後に控えた日本で、夢の中で「入れ替わる」ことになった田舎の女子高生と都会の男子高校生が織りなす物語。入れ替わりに戸惑いながらも相手の人生を楽しみ、打ち解けるようになった二人が、やがて訪れる悲壮な運命を変えようと奮闘する。原作者である新海誠は、東日本大震災で被害の大きかった宮城県閼上を訪れたことで本作の着想を得たといい、「もしも自分が閼上のあなただったら」という思いで作られた。新海誠はアニ

表 1

テーマ	読み比べた作品	学習者による考察
A 「時間が小説に与える影響」	・『果しなき流れの果に』 小松左京 1966 年 ○『時をかける少女』 筒井康隆 1967 年 ・『マイナス・ゼロ』 広瀬正 1977 年 ○『コーヒーが冷めないうちに』 川口俊和 2015 年 ○『君の名は』 新海誠 2016 年 ・『かがみの孤城』 辻村深月 2017 年	・「時間の感覚」の変容 ・人間の不安 ・社会情勢の変化 ・タイムリープの概念
B 「時代の変遷に伴う記憶喪失の描写の変化」	・『その木戸を通して』 山本周五郎 1960 年 ・『グイン・サーガ』 栗本薫 1979 年～ ○『奇跡の人』 真保裕一 1997 年 ○『博士の愛した数式』 小川洋子 2003 年 ・『明日の記憶』 荻原浩 2004 年 ・『静かな雨』 宮下奈都 2004 年 ・『ラン』 森絵都 2008 年 ・『春、戻る』 瀬尾まいこ 2014 年 ○『掟上今日子の備忘録』 西尾維新 2014 年	・ダイバーシティの浸透による共生社会への変容 ・「記憶喪失者」の生き方の変化 ・科学、医療の進歩 ・話題性と普遍性のバランス ・日常の在り方
C 「お悩み解決小説から見る「悩み」の対処法」	・『コンビニたそがれ堂』 村山早紀 2006 年 ○『まほろ駅前多田便利軒』 三浦しをん 2006 年 ○『青い鳥』 重松清 2007 年 ・『強運の持ち主』 瀬尾まいこ 2006 年 ・『ツナグ』 辻村深月 2010 年 ○『ヴァイオレット・エヴァーガーデン』 暁佳奈 2015 年～ ・『コーヒーが冷めないうちに』 川口俊和 2015 年 ・『猫のお告げは木の下で』 青山美智子 2018 年 ・『鎌倉うずまき案内所』 青山美智子 2019 年	・社会情勢の変化 ・全体主義から個人主義への移行（戦後の国全体の目標→現代の個人の目標） ・他者への関心 ・「悩み」の内容の変化
D 「承認欲求の暴走とその結果」	・『盲目的な愛と友情』 辻村深月 2014 年 ○『母性』 湊かなえ 2012 年 ○『何者』 朝井リョウ 2012 年 ○『むらさきのスカートの女』 今村夏子 2019 年	・SNS の普及等による承認欲求の増大 ・「承認欲求」という言葉の一般化による症例の増加 ・自己・他者承認

メーション監督であり、『君の名は。』は映画や漫画を媒体としたメディアミックスとして展開。小説発売後に映画も公開され、邦画史上最大の興行収入（当時）を記録した。

▽特徴

このグループの作品に共通するキーワードである「タイムリープ」、「タイムスリップ」の概念を題材にした作品は他にも『流星ワゴン』（重松清：2002 年／ドラマ化 2015 年）や『All You Need Is Kill』（桜坂洋：2004 年／映画化 2014 年）、『ナミヤ雑貨店の奇跡』（東野圭吾：2012 年／映画化 2017 年）などに代表されるメディアミックス化が盛んに行われており、その多くが成功を収めて一種の流行の様相を呈している。

『君の名は。』や『コーヒーが冷めないうちに』が広い年代に受け入れられ、この選書は自然

である。「21 世紀的なテーマ」を掲げて、これらの作品を読み比べていく中で、学習者が『果てしなき流れの果に』他の半世紀前の作品に関連性を見だし、比較研究を行ったところに探究学習の一種の理想型を見ることができる。地球規模の天災から個人の悩みまで物語の内容は多岐に渡るが、これら「タイムスリップもの」の大枠は過去に戻って今を変え、よりよい未来を導くストーリーである。これらが流行しているのは、周囲を取り巻く社会が行き詰まり、どこかに閉塞感を抱えている読者が多いことと無関係ではないだろう。「過去に戻って今を変えたい」、「未来をより明るいものにしたい」という願望が小説に表れていると言っている。21 世紀型の探究の一例として見るができる。

3) <表 1> B グループ「時代の変遷に伴う記憶喪失の描写の変化」の主要選択作品の概要と特徴

○『奇跡の人』真保裕一 1997 年

交通事故で一度は脳死判定をされたものの命を取り留め、「奇跡の人」と呼ばれている男が自分の過去を捜す旅に出る物語。事故であらゆる記憶を無くした主人公が 8 年間のリハビリを終え、退院するところから物語が始まる。個人的な記憶だけでなく社会常識や言葉に至るまで全てを失った彼が、もう一度人間として成長し社会生活に復帰しようとひたむきに努力する姿を描く。少しずつ取り戻されていく記憶とともに、主人公は残酷な過去と向き合っていく。1998 年にテレビドラマ化。

○『博士の愛した数式』小川洋子 2003 年

交通事故による脳の損傷で 80 分しか記憶が持続できなくなった元数学者「博士」と、彼の家に家政婦として派遣されたシングルマザーの「私」、「私」の息子「ルート」の三人の心のふれあいを描く。2006 年に映画化された。第 1 回本屋大賞受賞。第 50 回青少年読書感想文全国コンクール高等学校部門課題図書。2004 年には日本のテレビドラマを原作とした韓国映画『私の頭の中の消しゴム』がヒットし、同年に出版された荻原浩『明日の記憶』も本作と同じ 2006 年に映画化されるなど、「健忘」をテーマとした物語の流行が見られた。

○『掟上今日子の備忘録』西尾維新 2014 年

探偵だが眠ると記憶を失ってしまう「忘却探偵」の掟上今日子を主人公とした推理小説シリーズ。主人公は眠ると自分の名前や職業も忘れてしまうため、事件解決のために徹夜も辞さず、手足や腹に自分自身の情報や事件の内容をマジックでメモしている。障害である健忘症が物語を盛り上げるための要素として使われている好例である。また総白髪で眼鏡をかけた美女という、キャラクター性の強い設定となっている。2021 年現在、13 巻が出版されている。2015 年にテレビドラマ化。西尾維新の作品は講談社ノベルスから発行されているものの作風はライトノベルに近く、本作や『物語』シリーズで中高生に広く受け入れられている。ライトノベルの多くが文庫版で出版される中、西尾作品はソフトカバーの単行本で出版され、多くがシリーズ化されていることも特徴に挙げられる。

▽特徴

時代を経るにつれ、「健忘に蝕まれる」という考え方から「健忘とともに生きる」考え方へと変化していることが見て取れる。これは社会へのダイバーシティの浸透が大きな理由であると考えられる。『明日の記憶』に登場する若年性アルツハイマーが 1900 年代から研究が行われている難病である一方、『博士の愛した数式』や『静かな雨』で扱われる高次脳機能障害は 21 世

紀に入ってから本格的に研究が行われ始めた比較的新しい障害である。社会的認知度の観点から、前者を扱うものの方がより物語にリアリティがあり、障害によって登場人物が背負う悲しみは大きくなっている。全体として「健忘」そのものに対する悲壮感は時代を経るにつれて少しずつ和らいでいる印象があり、『掟上今日子の備忘録』などでは、キャラクター設定の一つとして扱われているなど積極性が見られる。

このグループは、文学における「記憶喪失」を悲劇としてとらえず、積極的に人間に起こりうる事案の一つとしてとらえることで、未来志向的に「21世紀型の探究」を進めようとしていた。またメディアミックスのテキストとしてさまざまな角度からのアプローチが可能なことも認識していた。

4) <表1> Cグループ「お悩み解決小説から見る「悩み」の対処法」の主要選択作品の概要と特徴

○『まほろ駅前多田便利軒』三浦しをん 2006年

東京のはずれに位置するまほろ市の駅前で便利屋「多田便利研」を営む多田啓介と友人の行天春彦の二人が様々な依頼を遂行していく物語。続編『まほろ駅前番外地』、『まほろ駅前狂騒曲』がある。2011年に第1作、2014年に第2作が映画化（2013年にドラマ化）されている。仰天春彦役の松田龍平の父松田優作の「探偵物語」を筆頭に、1970～80年代流行の「探偵もの」とプロットが酷似する。第135回直木賞受賞。作者三浦しをんは『風が強く吹いている』や『舟を編む』、『神去なあな日常』などで映画、アニメ等とのメディアミックスを盛んに行っており、いずれもヒット作となっていて、中高生によく読まれている作家である。

○『青い鳥』重松清 2007年

中学国語の非常勤講師、村内先生を中心にした群像劇。国語の先生なのに吃音症でうまくしゃべれない村内先生と生徒達の心の関わりが綴られる。場面緘黙症の生徒や担任をナイフで刺してしまった生徒、いじめの加害者となった生徒や父親の自殺に苦しむ生徒など、苦しみを抱える生徒達に寄り添い導く村内先生の姿を通して彼らの成長を描く。各話が1話完結型の短編小説になっており、比較的平易に読み進めることができる。重松清の小説は学校が舞台になったり小中高生が登場したりすることが多く、学校現場でもよく読まれる作家の一人である。表題作『青い鳥』は2008年映画化。

○『ヴァイオレット・エヴァーガーデン』暁佳奈 2015年～

4年に渡る大陸戦争後の世界で「自動手記人形」と呼ばれる代筆屋を営む少女、ヴァイオレット・エヴァーガーデンを主人公としたライトノベル。孤児で親も言葉も知らずに育ち、少女兵として対戦に参加して「戦闘人形」として恐れられたヴァイオレットは戦場で両手を失った暗い過去を持つ。戦争で人間の心を無くしてしまった彼女が、代筆屋を訪れる依頼者たちとの関わりを通して成長していく物語となっている。小説は計4巻。2018年にはテレビアニメ化、OVA化、2019年には映画化されメディアミックス展開として大成功を収め、史上唯一となる京都アニメーション大賞を受賞した。

▽特徴

社会全体を揺るがすような問題よりも、個人の小さな「お悩み」を解決する物語が書かれるようになっている事実は、戦中戦後の全体主義から個人主義へと社会の在り方が変容していることを如実に表している。このグループの作品の多くが、作中に登場する「お悩み」のひとつ

ひとつを解決していくという短編、もしくはそれに近い形で構成されていることが特徴として揚げられる。重松清や三浦しをんの作品のようにドラマ化や映画化がなされたり、『ヴァイオレット・エヴァーガーデン』のようにテレビアニメやOVAが制作されるなど、積極的にメディアミックス展開が行われるのは近年の小説の大きな特徴のひとつである。映像化されている作品は中高生に読まれている。

子どもの読書習慣は学校での朝読書に依存している部分が大きく、「短時間集中型」へと移行しつつある。それは『五分後に意外な結末』シリーズが大ベストセラーとなり、多くの小中学校で愛読されていることから明らかである。このような「小さな悩みを適宜解決していく」という物語のスタイルは子どもにも受け入れられやすいと言えるだろう。小説丸々一冊をかけて大きな事件を解いていくのではなく、小さな「お悩み」をテンポよく乗り越えて、問題解決のリズムをつかむ読書法は、時間に追われる現代人のニーズに合った文学への取り組みを示す好例と見ることができる。

5) <表1> Dグループ「承認欲求の暴走とその結果」の主要選択作品の概要と特徴

○『母性』湊かなえ 2012年

冒頭で起こる女子高生の飛び降り事件を軸に、母、娘、孫の3世代にわたる「母と娘」の姿を描いた物語。母親から大きな愛情を受けて育ったルミ子の手記と、その娘清佳の回想録という2つの視点から語られ、すれ違う母娘の思いを巧みに表現しているところに特徴がある。「信頼できない語り手」の手法を用いて、事件の謎を解明していくミステリー要素の強い小説となっている。作者の作品は2010年代以降盛んに映像化されており、映画『告白』やテレビドラマ『贖罪』、『夜行観覧車』等が著名である。本作も今秋映画公開の予定。

○『何者』朝井リョウ 2012年

就職活動に取り組む5人の大学生を主人公とした青春ドラマ。表面上は仲良く協力し合っているように見える5人であったが、裏ではお互いを牽制し合い、貶し合い、嘲けり合うようになっていて、それが進行する。人間の本音と建前という普遍的なテーマを「SNS」や「裏アカウント」といった現代的なツールを用いて表現した新しい小説の形である。第148回直木賞受賞。2016年映画化、2017年秋舞台化された。デビュー作『桐島、部活やめるってよ』の映画公開直後の出版である。

○『むらさきのスカートの女』今村夏子 2019年

「わたし」が、近所で有名な「むらさきのスカートの女」に強い関心を抱き、執拗に追いかける物語。周囲と馴染めず、社会から浮いている「むらさきのスカートの女」を見下し、自らの職場に引き込むことに成功した「わたし」だが、実は「むらさきのスカートの女」よりも孤独で悲惨な生活を送っていることが明らかになる。ストーカーの「わたし」が語り手という特徴ある設定。芥川賞候補『星の子』（2017年刊）の映画化のタイミングで出版されている。第161回芥川賞受賞。

▽特徴

「承認欲求とその暴走」を視点にして考察したグループである。「人から認められたい」という欲求と、その肥大化による暴走は人類普遍のテーマと言ってもよく、あらゆる時代で繰り返されてきた行為である。『母性』では前時代的な母子関係や嫁姑関係といった歪な家族が描かれ、『何者』では21世紀を象徴する就活やSNSというコミュニティを舞台にする。『むらさきのスカー

トの女』では現代の社会問題のストーカー行為を通して描かれる。承認欲求を時代状況に応じて表出させている。

グループのメンバーが別々の小説が意図せず「承認欲求」を軸にしていることを見出し、これが中高生の好む作品に含まれる現代的な課題であることを捉え、探究の課題とし、一定の論証を得た。

(4)総括

四つのグループそれぞれが行った読み比べとその分析・考察の視点は「時間」「記憶喪失」「悩み」「承認欲求の暴走」となり小説の内容や書かれた時代、ジャンルやテーマ等多岐に渡ったが、いずれのグループも21世紀型に通用するテーマとして適切なものを設定することができた。どのグループも文学における問題解決のありようをとらえ、予見性の高い分析・考察を行うことができており、探究学習として成功を収めたといえる。それは同時に、学習の過程における指導助言も一定の効果を発揮できたと評価してよいだろう。先述の通り、探究学習の際に生徒が選ぶテーマは多種多様である。指導者、助言者として生徒の手によって選ばれたテーマに沿った作品を逐一選んでアドバイスを行うためには膨大な読書経験や知識量が必要不可欠となる。また、生徒の分析や考察に助言を与えたりするためにはそれぞれの本を読破し助言に足るだけの見解を確立しておく必要があり、それぞれ非常に大きな労力を要することも事実である。この「日本文学から見る近・現代」は、探究的な取組であり、先進的な学習形態であるが故、実践モデルやデータ蓄積は乏しく、ラボに関わる指導助言やアドバイスの視点から見ると、汎用性という点でまだ改善の余地がある。

3. 実践例の考察 2 ―高等学校国語科における探究学習トレーニング

(1)文学作品の読み比べを手法とした探究学習

1) 実践の背景・目的

二つの高等学校で文学の読み比べによる探究学習を実践（先行実践も含む）し、分析を行った。

また、単元開発にあたり、文学には人間社会の問題を解決したり提示したりする姿が映し出されており、それらを読み取ることで、生徒が自ら文学に価値を見出すことが可能なのではないか、という仮説を立てた上で検討を行った。このような問題解決の視点を取り入れることで、生徒は文学の必要性を認識し、学習意欲を保つことができるのではないだろうか。また、従来の読解よりも新しい方法として積極的に取り組めるはずである。従来困難とされていた批評文の執筆についても、読み比べという方略を使い、文章の型を提示することで執筆のハードルを下げることができるのではないか。

以上のような仮説を踏まえ、本研究の目的として以下の四つを挙げた。

- ①新しい時代に対応できる「探究学習」の授業方法の構築
- ②文学の問題解決性を活かした文学教育観の構築
- ③自主教材の開発
- ④本格的な実験授業による検証および考察

2)「探究学習のトレーニング」の設定

2章で述べた「アカデミックラボ」は、教材やテーマを生徒が自由に選択するものであった。しかし、探究の経験が少ない生徒も一定数存在するため、初めから教室の全員がそのような形で探究学習を成立させることは難しい。まずは一定のトレーニングが必要である。そこで、今回は「探究学習のトレーニング」として、テーマや扱う教材は教員側で選定する形で単元を開発した。将来的には生徒が自らテーマや教材を設定するような、本格的な探究活動へ繋げる。

(2)文学についての仮説 ―予測困難な時代に対応する文学教育

先述した仮説について述べる。文学は、人間の生活や日常でうっすら持っている言語化しづらい感覚のようなものを、よりデフォルメし、強調した形で描き出しているものではないか、と考える。またこれを文学の「日常的・生活的事実」と呼ぶ。例えば、有川浩の『塩の街』という小説では、体が塩になる病気が流行するという設定だが、これは人間の、得体のしれない病原菌が流行する恐怖をデフォルメして描いているものだと考える。

文学の中に描かれている「日常的・生活的事実」に着目した上で、それがどのように文学の中で人間の問題を解決し、映し出しているのかに着目する読み方は、人間が普遍的に持っている感覚をより鮮明にしたり、人間の今後の世界を予見する（予見性）ことを可能にしたりするとの仮説を立てた。

この探究的な読み方は、生徒が受動的にならず、文学を自らで価値づけることができる読みとなり、予測困難な時代に対応する力になるだろうと推測する。これが新しい文学教育の意味と考える。

「日常的・生活的事実」については、そのままでは生徒にとって捉えにくいいため、文学を一旦〈モノ〉（物質）・〈コト〉（事象）の二つに分けて要素を取り出し、それを読み比べのテーマにすることとした。実践の意図としては、まず〈モノ〉から入り、〈コト〉に移っていく形である。〈モノ〉が基本で、〈コト〉の方が抽象的な分、より発展的なテーマとする。〈図1〉として示す。



図1

(3)先行研究

次に、指導要領や先行研究について「探究学習」「読み比べ」について分析したところ、問題点として、課題設定についての具体性の欠如や、指導事項と言語活動の乖離等が見出された。⁶⁾そこで具体化を図るため、探究の条件として「一定の質・量があること」・「生徒が自らの力で再現できる汎用的な方法であること」・「生涯にわたって探究できる継続性のあるテーマ選びで

あること」を挙げた。

これらの条件を満たす高度な先行実践として、大村はまの大規模な実践が見出された。

大村はまの「単元 各国に生きる現代の子どもたちの姿」は、昭和五十一年十月に、石川台中学校の二年生に向けて行われた実践である。岩波児童文庫を複数作品読み、「冒険」というテーマならこの本、というように観点を決めて読み比べるものである。⁷⁾

実践の概要：

①『岩波書店児童図書総合目録（一九七六年一月）』の「岩波少年少女の本」で選ばれている作品 33 冊のうち、希望の本を貸与し、夏休み中と授業時間を使い、読む。（ただし宿題の形ではなく、児童の自主性に任せている）

②〈てびきプリント〉を配布し、視点について説明したのち、「この作品はここに視点を置いてみたら」とカードの記入方法を説明する。

記入方法…一冊読むごとに、「この作品はここに視点を置いてみたら」に記入する。「ここにこそ」と思うときは①、「ここでやはり忘れてはいけないだろう」と思うときは②、「ここで取り上げたい部分がある」というときは③の印をつける。大村が挙げている視点は、「現在と社会に関わる問題」「おとなの世界へふみこむころ」「自分とのたたかい」「なぞをとく・探検」「戦争の問題」「身近な生活を新しい角度から」「空想・夢」「ふれあい」の 8 つである。例えば、「クローディアの秘密」を読み、この話は「なぞをとく・探検」という視点で読むべきだと強く考えたなら、①をつけるということである。その後、カードには、それぞれの視点において、作品名とページ番号に対応させる形で、「場面なり、ことばなり、視点とどのように関連しているか、わかるように」書く。

③「ここに視点を置いてみたら」をまとめたデータを児童に共有し、話し合うことで、それぞれの視点ごとに、取り上げるべき作品を二作品ほど決める。その際も発言の切り出し方や内容の例が羅列された〈てびきプリント〉を使用して補助する。

④視点に関連付けながら、作品に出ている各国に生きている子どもたち、同時代を生きている人の心、考えをとらえる話し合いをする。

ただし、「どういうところにどういう姿が出ているか」というような問答で進めるのではなく、「具体的な生活場面で、この作品に出ている少年少女なら、この場面では、このようなことを言い、このような行動をとるであろうと具体的に考え、話し合う」という方策をとっている。

例えば、「クラスの中で、いつも仲間に入れてもらえない少年がいる」「誰も住んでいないような古い木造の家を見つけた」などという具体的場面で、その作品の人物はどのような言動をするかどうかを考えさせるということである。

⑤作品を読み終わって、「自分の考えや生活にどのような変化があったか、今まで味わったことのなかった気持ちを味わったか、何か夢を持ったか、何か決意したか、この作品は自分の中に何かめざめさせたか・何か加えたか、自分のどんなところかを、ゆさぶってきたか」を考えるために、A 話し合いのまとめの文章、B 学習を終えての感想、という二種類の文章を書かせている。

具体的には、以下のようなものである。

A：読んだ冊数と書名、その中から特に書きたいものを選び、様々な生活場面を取り上げて登

場人物がどのような言動をするのか、なるべく多くの場面を取り上げて表に記入する。

B：冊数、「ものの考え方や生活が変化してきた」点を書く。その後、「このようにして、私は、今まで味わったことのなかった…という気持ちを知ったのである」「また、私は、夢をもった。…という夢をもった。」「それに、決意したことがある。…」「この作品は、私の中に、新しい…を目覚めさせた。私という人間に…を加えた。」「この作品は、私の…ところを、強く揺さぶったのである。」という例文を参考に感想を書く。

この大村実践の優れた点として、自然な活動によって、生徒の人生と文学を繋げて捉えることができていること、明確な成果物が設定されていること、協働し、読み比べる活動の原型があることなどが挙げられる。問題点としては、1970年代の実践で現在必要な力を直接意識した実践ではないこと、大村のマンパワーによる部分が大きいパッケージ化し再編成が必要なことなどが挙げられる。

(4)「果物」をテーマとした実践

1) 実践の概要

実際に行った二回の実践授業のうちの一回目について報告する。

実践における協働的問題解決（グループで読み比べ）は、寺田（2012）が挙げるような小集団の読みの働きを期待し、読み比べはグループによる協働的問題解決によって行う。批評文の交流については、山元（2021）は、同じテキストを読むことで生まれた「喚起」や「反応」を共有することは、「読み手」として自分が営んできた意味づけのプロセスを捉えなおしたりすることを可能にすると述べている。そのようにして「深い学び」を駆動することを狙い、「ファンレター」の活動を設定する。実践はこれらの理論から着想を得て構築した。^{8) 9)}

実践の一回目のテーマは〈モノ〉のうちの「果物」で、京都市立の高校三年生を対象に行った。学力はそれほど高くなく、探究や書く活動にも慣れない生徒であった。以下単元の概要である。

- ・テーマ：〈モノ〉果物。「日常的・生活的事実」として、生徒の実感に近すぎず遠すぎないテーマ。
- ・対象：京都市立 A 高等学校 第 3 学年 2 クラス（12 名 + 31 名 計 43 名）
…学力はそれほど高くなく、探究や書く活動にも慣れない生徒であった。
- ・配当時間：10 ～ 11 時間 ・授業者：樋口紫乃教諭
- ・目標：果物と人間の関係性について抽象化・一般化 / 本文に基づき自分の考えを論述 / 他者との交流で深める
- ・八作品（実質七作品）現代文学 2 編 近代文学 3 編 詩 2 編 を読み比べる。
教材名：『檸檬（梶井基次郎）』を中心とし、『レモン哀歌（高村光太郎）』『蜜柑（芥川龍之介）』『ざくろ（川端康成）』『白いぼうし（あまんきみこ）』『メロン（江國香織）』『檸檬（さだまさし）』『lemon（米津玄師）』計八作品

単元の流れは以下のとおりである。

- ①「果物」が出てくる文学作品を八作品通読。注釈付きワークシートで果物の箇所に印をつけ、問題解決の強弱を判断して、＋－を付けながら行わせる。(第1～4時)
 - ②梶井基次郎の『檸檬』十一作を自由に選び、観点を決めてグループで読み比べる。(「問題解決の度合いは」必ず観点に加える)(第5～6時)
 - ③読み比べた成果をグループで発表する。
問い：「文学において果物はどういう役割をしているのか」(第7時)
 - ④十一作を選び、観点・表現を論拠に個人で批評文を書く。(第8～9時)
 - ⑤批評文を読みあい、批評(ファンレター)を書く。(第10時)
- ※実践の開始前と終了後にアンケートを実施。

使用した教材は本文を含め自作した。また特筆すべき点として、ルーブリック評価を事前に学習者と授業者の間で共有した。

2) 批評文の結果

生徒の批評文を、論証力(本論の引用・根拠の適切さ)/分析力(それぞれの観点が説明で終わらず、新しい考え方を書けているか)/考察力(結論で全体を一般化し、果物以外のものにも論が発展しているか)で分析し、S・A・B・C・Dの五段階評価を、5～1の数値に置換した。結果、以下の表のようになった。＜表2＞として示す。

表 2

	論証力	分析力	考察力
4組平均	4.75	4.33	3.33
3組平均	3.42	3.42	3.33
2クラス平均	3.89	3.74	3.33

このように考察力が最も低い結果になった。ただ、これは探究が初めての生徒たちの取り組みとしては十分と言える数値で、単元の継続が考察力の向上には重要ではないかと考察した。

また、読み比べに選ばれた作品は、難解な川端康成の『ざくろ』が多く、ここから問題解決が鮮明な作品に魅力を感じるのではないかと仮説が立った。

生徒の批評文の実態として、以下の生徒の批評文からの引用のように、「果物が人間にプラスに働きかける」など自分なりに価値づけしていた。

果物が人の生まれ持つ五感に素直にはたらきかけた結果、ストーリーはプラスに転じたのだと考えた。(略)まず果物は、太陽や自然の恵みによって生み出されるものである。手を加えないその純粋な爽やかさや甘み、鮮やかな色、香りは人々の心を澄み渡らせ、豊かにするのだと思う。果物は、私たち人間をどこか潜在的に惹き付けるクリーンなイメージを持つ。だからこそ作品中の人物たちは果物との出会いによって、自分の心と素直に向き合うことが出来たのだろう。

また、以下のように発展的に自分の生活に結び付ける生徒もいた。

今回取りあげた三作品と同じように、味や色が今の自分の気分とぴったり重なったり、知らなかった自分の気持ちに気付かせてくれたりするものが案外すぐそばにあるのかもしれない。(略) 果物がもたらすこのような影響は、現代を生きる私たちにも通ずるのではないだろうか。日々様々な課題を抱え懸命に生きている中で、きっとなんらかの壁にぶつかってしまうことがあるだろう。そんなとき、小さなきっかけで手に取った果物が私たちの気分を変え、そのおかげで状況が良い方向に進むことがあるかもしれない。果物に限らず、自分が好んでいるほかの食べ物に置き換えてみても同じことがいえる。普段何の意識もせず食べているものが、気付かないうちに自分を励まし動かしてくれているのかもしれない。

以下のように、別の作品と結び付け、間テクスト的な志向が働いている生徒もいた。

ここで分かったことは、果実の様な五感を感じるものにはその物語の進行に影響している。他の果実ではなく五感を感じさせられるような小説にも当てはまるのではないだろうか。過去に読んだ三浦哲郎の『盆土産』という小説とも繋がるのではないか。今後そのような小説に出会った際、観点を検証したい。

3) ファンレターの結果

結果を着眼力（構成・表現・内容の適切な評価）/ 考察力（自分の結論や一般化との比較による全体の評価）の観点で S・A・B・C・D の五段階評価を行い、数値化した。＜表 3＞として示す。

表 3

	着眼力	考察力
4 組平均	3.77	2.64
3 組平均	3.09	2.48
2 クラス平均	3.43	2.56

上記のように同じく考察力が低い結果となった。内容としては、共感・同意・面白いと感じたことを伝える生徒が多かった。また、批評文の書き方について他者の記述を参考にするものや、逆に助言をしている姿も見取れた。気付かなかった、自分と違う意見などを挙げている生徒も多い。

また、以下のように他者の批評文から考察を発展させている生徒や、今後の行動に言及している生徒もいた。

僕は『檸檬』をマイナスからプラスに大きく解決したと読み取っていたけど、(生徒名)さんは、マイナスの原因が分かっていないから、それは一時的なものでレモンがなくなるとまたマイナスになってしまうと解釈したのかなと思って、とても納得させられました。

4) プレアンケート・ポストアンケート結果

プレアンケートでは、小説の授業が好きと答えた生徒は8割いたが、読むコツはわからないと答えた生徒が7割おり、自信はないようだった。

ポストアンケートでは、多数の生徒が単元に対して興味、新鮮さ、面白さを感じ、意欲が向上したと記述していた。また、キーアイテムを分析することで問題解決ができた、目的を持って読み比べることで方法が理解できた、他者との交流でさらに考えが深まった、など満足度の高い結果となった。

5) 達成状況と成果

自分で文学から価値を掴み取り、言葉にすることができたということ、一つの作品の中で閉じた読みではなく、生活や他の作品などに拡張性がある読みになったこと、意欲の向上が見られたことが達成状況として挙げられ、探究活動のトレーニングとして一定の成立を見たと評価できた。

6) 課題

課題としては、結論の一般化が難しく、発想の経験のない生徒や、全体を通しての解決の視点が薄い生徒へのアプローチ、表現力不足の解決、時間不足の解消、などが見出された。

(5) 「泣く」動作をテーマとした実践

1) 実践の概要

対象は私立高校進学コースの高校二年生である。学力水準が高く、探究や書く活動にも慣れていた。テーマ：〈コト〉泣く動作。

- ・対象：私立 B 高等学校 第 2 学年 3 クラス (29 名 + 29 名 + 34 名 計 92 名)
- ・配当時間：5 時間 ・授業者：西村裕子教諭
- ・目標：泣く動作と人間の関係性について結論で抽象化・一般化 / 本文に基づき自分の考えを論述 / 他者との交流で深める
- ・八作品 現代文学 3 編 近代文学 3 編 詩 2 編 を読み比べる。
- ・教材名：「泣く」シーンのある「トロッコ (芥川龍之介)」、「手巾 (芥川龍之介)」、「伊豆の踊子 ※ラストシーンのみ (川端康成)」、「デューク (江國香織)」、「Water (吉田修一)」、「海の方の子 (山田詠美)」、「夕方の三十分 (黒田三郎)」、「くらし (石垣りん)」の八作品

大きな「果物」実践との違いとして、半分の 5 時間程度でコンパクトに行うために、夏休み課題で教材を読んでもらうことにし、時間調整をしたことが挙げられる。単元の流れは以下の通りである。

- ①「泣く動作」が出てくる文学作品を八作品通読。注釈付きワークシートで「泣く動作」の箇所に印をつけ、問題解決の強弱を判断して、＋－を付けながら読む。(夏休み課題・第 1 時)
- ②グループで読み比べたい 2 作を選び、観点を決めて読み比べる。(第 2 時)
- ③読み比べた成果をグループで発表する。(第 3 時) 問い：「人間が泣くときはどういうときか」

- ④十一作を選び、観点・表現を論拠に個人で批評文を書く。(第4時)
- ⑤批評文を読みあい、批評(ファンレター)を書く。(第5時)
- ※実践の開始前と終了後にアンケートを実施。

2) 批評文の結果

前回と同様に分析すると、前回とは異なり考察力が論証力・分析力よりも高い結果になった。

ここから、批評力のある生徒は、人間が「泣く」時とはこういう時、という結論の一般化・仮説を先に立て、それを検証するという形の思考ができていると考察ができた。〈表4〉として示す。

表 4

	論証力	分析力	考察力
AB 文平均	4.03	4.17	4.55
AB 理平均	3.86	3.75	4.31
12 組平均	4.20	4.11	4.51
3 クラス平均	4.04	4.02	4.46

また、選ばれた作品についてもやはり傾向があり、問題解決の大きいものは選ばれるのではないかと考察できる。これは、今後の教材選定など、単元開発に生きる視点であると考えられる。生徒の批評文の実態としては、成長を促す、などと結論を一般化する生徒が多かった。

また、泣く実践では、自分の生活に関係づける生徒が多く、改めて自分の経験を価値づけていた。

『泣く』という動作は、簡単に言えば、「涙を出す」ということではあるが、文学においては、そこに人間の様々な感情を乗せ、同時に、周囲をその人と一体化させることで、人間の成長を促したり、悲しい時も嬉しい時も人間に寄り添うものとして描かれていると考察した。

また、こちらが提示した教材以外からも自主的に選び、批評文を書いている意欲的な生徒もいた。

私は過去に小説で、親しい人が亡くなった状況で不思議と涙が出ない、というような文章を読んだことがあった。その人は、しばらくして何かの拍子に泣くことができ、本当の意味でその死を受け入れることができた。私はこのような場面でも、今回の考察が当てはまるのではないだろうかと思い、改めてそのような文章と出会った時に様々な観点から検討してみたいと思った。

この考察は私達の生活にも共通する。幼いころに、私はよく父から「泣くな」と言われていたため、『泣く』ことはマイナスなものであると考えていた。しかし、この『泣く』動作は人にプラスの物を与えるという今回の考察を踏まえると、確かに子どものころに泣い

た記憶はかなり鮮明に覚えているし、その経験があつて今の自分がいるとも思える。つまり、『泣く』ことが決して悪ではない、むしろ私達に良い影響を与えてくれるのだと気付いた。

3) ファンレターの結果

ファンレターは、他者の結論全体へ言及する意見が前回の実践よりも増え、考察力が上がっている。また、論の不明な点を指摘する記述も見られ、全体の水準が上がっていた。＜表 5＞として示す。

表 5

	着眼力	考察力
AB 文平均	4.34	4.20
AB 理平均	3.91	3.90
12 組平均	4.05	4.15
3 クラス平均	4.10	4.08

4) プレアンケート・ポストアンケート結果

プレアンケートは、学力の違いに関わらず、前回の生徒とほぼ同じ数値になっていた。

ポストアンケートは、前回と同じく、身についた力として読解力、比較力を挙げ、活動の面白さに言及していた生徒が多かった。また、「泣く」は「悲しい」「嬉しい」だけではないというように固定概念を払うもの、「現実でも同じではないか」など生活との関連に言及するもの、泣くことが問題解決・小説を動かすことに気付く生徒などがいた。前回との違いとしては、「絶望」「愛情」など心的状況・抽象的なものでも読み比べてみたいという提案があり、本格的な探究への芽が見られた。

5) 達成状況と成果

「泣く」実践では、果物よりも精度が高い・例えば文字数でいうと全員が 1400 字以上の一定のクオリティの批評文ができたこと、他作品や他テーマへの発展性・拡張性がみられたこと、ファンレターがより批評的になった、効果的な考察の方法について仮説が得られたことなどの成果が得られた。

6) 課題

課題としては、抽象度の低い結論になっている生徒が、少数ではあるが存在したことが挙げられる。

(6) 研究を通しての結論

1) 成果

本研究の成果として、仮説と対応する形で、以下のことが挙げられる。

- ①文学の問題解決性に着目して読むことが生きる力に繋がるのではないかと仮説は、生徒の批評文などの成果物から、一定の質を担保して証明できたこと。
- ②「日常的・生活的事実」と人間の関係性を見取るという文学観がひとしなみに成立したこと。
- ③問題解決の視点を取り入れることで、生徒は文学に新たな価値を見出し、学習意欲を保つこと

ができており、従来の読解よりも新しい方法として積極的に取り組むことができていたこと。

- ④書くことが苦手な生徒であっても、読み比べという方略を使い、自らの問題と重ね合わせることや、型を示すことで、全員一定の質・量の批評文を書くことができていたこと。
- ⑤探究学習のトレーニングが一校で成功し、本格的な探究学習が一校で成功したこと。
- ⑥2校の差から、批評的表現力についての仮説を得られたこと。
- ⑦〈モノ〉〈コト〉のマトリックスを一定の有効性を担保にして形作ることができたこと。
- ⑧教科書教材から展開する探究学習の可能性を広げることができたこと。

2) 課題・展望

課題、展望としては、以下のことが挙げられる。

- ①批評のための表現力をどう保証するのかということ。
- ②高校三年間の国語科におけるカリキュラム編成・モデル化の必要があること。
- ③本格的探究の単位についても開発し、生涯学習へ繋げていく視点を持つ必要があること。
- ④基礎研究・文学理論が不足していること。
- ⑤もの・コトのマトリックスや、古典・翻訳文学など教材のさらなる充実が必要であること。
- ⑥教員・研究者・司書、インターネット等チームで取り組むためにさらなる組織化が必要であること。

4. 結論

探究学習の見通しがほぼ立たない高校文学の授業に関して、一定の有効性をもつ方法の提示とその理論的考察を示すことができたことが大きな研究成果といえる。

まず、2015年からの嵯峨野高校アカデミックラボ「日本文学から見る近・現代」の実践の意義を検討するとともに、2021年度実施の同ラボの成果を現状の最も高い到達水準の実践例の一つとしてその方法及び成果を分析した。主に、文学における21世紀型の課題のあり方とその考察の実態を捉えた。四つの課題「時間が小説に与える影響」、「時代の変遷に伴う記憶喪失の描写の変化」、「お悩み解決小説から見る「悩み」の対処法」、「承認欲求の暴走とその結果」のいずれもが現代的課題であること、その探究から学習者が文学の未知の世界の予見性・感覚をもつこと、未知の世界への見通しが得られることを一定レベルで論証したことが成果として見出された。これらは、「高等学校国語科における探究学習トレーニング」を立案する仮説導出の基点となったが、その有効性も再確認できた。

ついで、伊藤汐里が主に取り組んだ「高等学校国語科における探究学習トレーニング」は、教科書教材を起点に探究学習が展開できる可能性とその有効性の検証のために行われた二つの実践だが、十分な学習成果が得られ、その検証も十分達成した実践例と自己評価することができた。易から難への学習段階を設け、「モノ」としての「果物」、ついで高次の「コト」としての「泣くこと」を探究課題に設定したが、どちらも読解的な読みではなく、自らの世界と作品中の世界を関係づけ、人間と文学の関係を再構築する探究的学習が実現した。本格的な探究学習のためのトレーニング学習という位置づけだったが、学習者全員の探究意欲、探究の質の高さ、学習者相互の協働性、単元の提案性の高さとその実現など、多くの点で成果が把握できた。特

に両者とも一定分量の文学批評文作成の成果を達成したことは、「活動あって学びなし」と警戒されてきた文学の探究学習の有効性の証明となった。

課題として、単元の簡略化、使用する教材（作品）についてのデータベース化、開発した学習方法・指導方法の汎用化、先行実践の適切な分析とデータベース化などが挙げられる。

* 本文の執筆分担

植山俊宏は、「1. 研究の目的・方法、及び背景」、「4. 結論」の担当と、全体の加筆修正を行った。

湯浅佑介は、「2. 実践の考察 1—嵯峨野高等学校アカデミックラボ「日本文学から見る近・現代」—」を担当した。

伊藤汐里は、「3. 実践の考察 2—高等学校国語科における探究学習トレーニング—」を担当した。

参考文献

- 1) 坂東茉莉加・植山俊宏・伊藤汐里「学習者の小説教材に対する距離感・違和感を基点とした読むことの授業の構想—因果関係を軸とした小説の謎解きの読みの展開を見通して—」『教職キャリア高度化センター教育実践研究紀要』, 京都教育大学教職キャリア高度化センター, 3, 2021, pp.115-124
- 2) 中央教育審議会初等中等教育分科会「資料 1 教育課程企画特別部会 論点整理」文部科学省, 2015, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1364310.htm
- 3) 植山俊宏「『言葉の学び』の資質・能力を育てる単元学習の開発—文学の探究学習の可能性—」『月刊国語教育研究』, 日本国語教育学会, 598, 2022, pp.5-6
- 4) 公式 HP「学科案内京都こすもす科共修コース」「普通科」嵯峨野高校, 2022, <http://www.kyoto-be.ne.jp/sagano-hs/2-kyouikukatudou/24kyosyu.html>, 同左 25futsuka.html
- 5) 細矢衡・小野田磨柚・齊藤匡紀・山根有貴・古志優佳・植山俊宏「嵯峨野高校アカデミックラボ『日本文学から見る近・現代』に対する 大学院生・大学生・研究生の支援・指導に関する実践的研究」『教育実践研究紀要』京都教育大学教職キャリア高度化センター, 18, 2018, pp.118-132
- 6) 浜本純逸、幸田国広 他『ことばの授業づくりハンドブック 探究学習—授業実践史をふまえて—』溪水社、2020
- 7) 大村はま『大村はま国語教室 7 読書生活指導の実践(一)』筑摩書房, 1991
- 8) 寺田守『読むという行為を推進する力』溪水社, 2012
- 9) 山元隆春「ローゼンブラット『交流理論』の再検討—リテラシー教育基礎論としての意義を中心に—」『論叢 国語教育学』17, 広島大学国語教育研究会, 2021, pp.51-64

